

東方からの来訪者

マタイによる福音 2:1-12

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない
お前から指導者が現れ、
わたしの民 イスラエルの牧者となるからである。』

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

説教

<ながい前振り>

公に現れると書いて公現、イエスの誕生によって神の栄光が現れたという意味です。原語ではエピファネイアといいます。年末にテレビの競馬中継を見ていたらエピファネイアという馬が出走していて、あれーとおもいました。

ひょっとして教会関係の馬なのか？興味をもったので調べてみたところ

エピファネイアは日本の競走馬。馬名の由来は、ギリシャ語でクリスマスから12日目にあたる1月6日「公現祭=エピファネイア」。母シーザリオと同じく、ウィリアム・シェイクスピアの喜劇『十二夜』にちなむ馬名。(Wikipediaより引用)

この説明ではよくわからなかったわたしは、続いてシェイクスピアの喜劇『十二夜』を調べてみました。すると母馬の名前シーザリオは登場人物の名前なのですぐに納得しましたが、エピファネイアって名前はシェイクスピアの喜劇にはでてきません。悩んでいたところ、ふと気づいたのが十二夜だから公現、だからエピファネイアかと合点がいきました。『十二夜』の原題はTwelfth Night(十二夜)、12はトエルブだから、そうかTwelfth Night(十二夜)=エピファネイかとようやく気づき、馬主さんもずいぶん洒落っ気があるなあと思いました。

ついでですが、シェイクスピアの『十二夜』の本筋にはキリスト教で祝うエピファネイアに関係した話はでてこないそうです。ほんとかどうかわかりませんが、1601年の1月6日の公現祭でエリザベス女王がトスカーナのオーシーノー公爵を招いて盛大な宴を催し、その時に上演されたので「十二夜」という題名になったそうです。でもシェイクスピアはその題名にもなにか謎をかけているかもしれません。

<ヘロデとわたし>

調べてみるといろいろわかってきておもしろくつい調子にのってしまったのですが、これってきょうの福音にある、ヘロデと同じなんじゃないかって気づきました。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。2:2-3

東からの来訪者のとつぜんのユダヤ人の王の出現宣言に驚き、おののき、不安になったヘロデ王はそれから自分の手下の祭司長たちや律法学者たちに調べさせ、それでもはつきりしないので「占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた」とあります。

ヘロデ王は当時のイスラエルの支配者です。彼がイエスの誕生 = ユダヤ人の王の誕生というニュースを東から来た占星術者から聞いてすぐにとった処置は有能な権力者のように思えます。福音書ではヘロデの思惑は実現できず、彼のおこないは悲劇を生んでいます。

新共同訳のマタイ2章の見出しであらずじを追ってみると

占星術の学者たちが訪れる：本日の福音箇所

エジプトに避難する：夢のお告げでヨセフ一家は逃げる。

ヘロデ、子供を皆殺しにする：だまされたことを知ったヘロデは情報を元に皆殺しという暴挙に出る。

エジプトから帰国する：ヘロデが死んだことを夢のお告げで知ると、お告げにしたがってヨセフ一家はナザレに移り住む。

<意識と無意識>

きょうの福音から、偶然に馬の名前が思い浮かんだのですが、そこからわたしは意識的にその馬のことを調べだしました。ひょっとしたら説教のネタになるのではないかという思惑から熱心に調べだした。するといろいろなことがわかってくる。知らなかったことが分かるようになってくる、知る喜びのようなものがでてきました。でもそれは自分が意識的にやったことです。

そのわたしのやり方というか態度はヘロデと同じとさっきいいましたが、それはヘロデも突然聞いた王出現のニュースに対して意識的に、そして自分の能力を有効につかい、また王としての権力も使って調べだしました。最期は

占星術者たちをつかって正確な情報を知ろうと画策しました。

それに対して占星術者たちは「星の導き」「夢のお告げ」で行動しています。意識的に行動しているわけではありません。ヘロデが自分の能力と自分の意思で意識的にふるまっているのに対して、占星術者たちは自分たちの力や能力ではなく、星や夢をたよりに行動し、イエスを見出し、礼拝しました。意識に対して、無意識にしたがって行動したといえます。それは信仰のことばでいうと聖霊に従ったということです。自分の思いを優先させるのではなく聖霊にしたがって歩むという、わたしたちのお手本となる態度・姿勢です。

<マタイのプロローグ>

マタイの伝えるイエス誕生の物語はきょうの福音箇所をのぞけばさきほど概括したように暗く辛い話です。

2:16 さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。

殺された子どもたちはやりきれません。キリストは救い主どころか疫病神です。またなんの理由もなく幼子を失った母親たちも哀れです。その一方でヨセフ一家は夢のお告げでエジプトに難を逃れています。どうして幼子イエスはヘロデの幼児大量虐殺を天の軍勢を遣わして阻止しなかったのか。救い主の誕生とともにその奇跡が現れていたほうがどんなにかイエス誕生の栄光の物語として多くの人の心をうったことでしょう。

しかしマタイは神は、ヘロデが暴虐を尽くすのをそのままにし、イエスが誕生したために無垢な幼子が殺されていくのになにも手を打たなかったと記しました。わたしたちの常識では考えられないことですがそこに救いの道があることを示したのです。それがどんな道なのか、2章ではまだあきらかにはされませんが、その後のイエスの歩み、そして十字架によってはっきりとその救いの道は示されるのです。
